



上林曉全集十一

筑摩書房

上林曉全集 十一

昭和四十二年一月三十日第一刷發行

著 者 上 林 曉

發行者 竹之内 静雄

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 七六五一 (代表)

振替 東京 四 一 二 三

印刷 多田印刷株式會社
製本 矢島製本株式會社

上林曉全集第十一卷目次

初詣	三
猿飼村の小松さん	二四
父母の膝下	三八
岬の僧坊にて	五五
夏野	八五
和日庵	一〇三
懸賞作家	一三五
四萬十川べりの宿	一五五
揚雲雀	一六六
閨門に倚りて	一七八
櫻貝	一九四

つつじを見る	二二一
武雄さん	二三三
田頭先生	二五五
過ぎゆきの歌	二七二
深山の清水	二九九
三十年一昔	三二三
春の坂	三三一
良ちゃんの幻	三四五
絶食の季節	三六六
結構人	三八三
同窓會	四〇〇

四面館騒動……………四一九

尋ネ人尋ね當る……………四三九

書誌……………四五三

小說
十一

初詣

1

正月二日は、元日がホカホカと暖く風一つなかつたのに引きかへ、少し風が出て底冷たかつたが、やはり好晴だつた。

猿江は起きるとから、そはそはした。園子と初詣をする約束がしてあつたからである。園子は小料理店「あかね」の若いおかみである。十二時に、辨天驛前廣場のバス發着所で待合はせ、それからバスに乗つて行つて、高井八幡に參詣する手はずだつた。

家族揃つて膳に向つたのは、十時頃だつた。彼はさあらぬ態を裝ふため、逸る心をおさへて、元日よりも餘計に屠蘇の盃を重ね、息子を相手にお銚子も一本空けた。雑煮のお代りも減じなかつた。ゆつくり附合ふのをわざと見せようとして、飯も二杯食つた。

食事がすむと、猿江は直ぐ立上つて、顔を剃りにかかつた。何がなんでも、顔だけは當つて行きたかつた。風呂は、初湯なんだが、見合はせることにした。園子はきれい好きだから、きつと風呂に入つて来るにちが

ひない。彼も園子にならつて、風呂に入つて行きたかつたけれど、暮に風を引いてゐて、湯ざめでぶり返す恐れがある上に、何より心が急いてゐた。「ぐづぐづしてゐて、誰か年賀の客に來られては困る。さつさと家を出なくちやア」と、彼は早目に出かけてあとをくまらず肚だつた。もし何かにひつかかつてゐて、園子を焦ら焦らさせたり、プリプリ怒らせたりしては濟まなかつた。待ちぼけを食はせて、折角の樂しみがおぢやんになる心配もあつた。

「おなかが一ぱいになつたから、腹減らしに、一寸ブラブラ散歩して來る。高井八幡公園まで行つて來るかも知れん。正月着を出してくれ。」と、猿江は顔を剃り終りながら、妻に言つた。

妻は簞笥の中から、暮にこしらへた新しい晴着を取り出した。ミシン用の椅子に腰かけて、火鉢のふちで足をあぶりながら、しつけ絲を取りにかかつた。もどかしく待つてゐるうちに、先づ袴のしつけが除かれた。やつと羽織のしつけも取つてしまふと、妻は猿江の着換へを手傳つた。

「馬子にも衣裳つて、よく言つたものねえ。」と妻は猿江を着せかけながら、冷やかした。

「馬子は、ひどいねえ。」と猿江も笑つたが、新しい晴着は満更でなかつた。

支度が出來て、いざ立たうとしてゐるところへ、玄關にドサリと音がして、年賀郵便だつた。娘が飛び出して行つた。戻つて來ると、娘は手に餘る年賀葉書を早速選りはじめた。

猿江もつい心を惹かれて、娘の選り分けるのを待つた。「お父さんのばかり多くて、詰まらないわ」と言つて、娘が彼の分を渡してくれると、大急ぎでめくりはじめた。玄關に誰か訪ねて來た聲のしたのは、まだ十枚とめくらない時分だつた。「しまつた！」と、彼は思つた。年賀郵便なんか到手間取つてゐた自分が腹が立つてならなかつた。彼は手を合はせたいほどの氣持で、座敷に通さないですむ客であつてくれることを祈つた。

「小溝さんがいらつしやつて下さいましたわ。」と妻が取次いだ。

懇意な文學仲間の小溝では、仕方がなかつた。猿江は玄關に出て行つて、ニコニコしながら招じ上げた。

「やア。どうぞ、どうぞ。」

小溝が座についた時は、十一時三十五分だつた。猿江は胸の中で、時間を繰つて、十二時まで小溝をもてなし、その時になればどうかして出かけるやうにする算段だつた。驛前廣場までは十五分くらゐかかるので、約束の時間よりそれだけ遅れるわけであるが、それくらゐのことなら、園子も辛抱して待つてゐてくれるにちがひないと思へたのである。

なかなかお酒の燗がついて來ないのが、猿江はじれつたかつた。燗がついて來ると、せつかちにお銚子を取上げた。

「この酒はねえ、關西に住んでゐる僕の郷里の女が、僕の紹介狀を持つて或るミス募集に應募して、準ミスになつたものだから、そのお禮に灘から持つて來てくれたんだ。いい酒でせう。」と酒の來歴を話しながら、猿江は立てつづけに酌をした。

「いい酒ですねえ。その女はきれいですか。」

「うん、きれいだ。背が高く、初ひ初ひしい感じのする娘だ。準ミスになつたものだから、今度は映畫女優を志願してるよ。」

「どこか、映畫會社にきまつたんですか。」

「いや、まだきまつてない。それで苦勞してるやうだ。」

「ミスとか準ミスとかにならなければ、苦勞しないですんだのに、それになつたばかりに、苦勞するわけですねえ。」

その時また玄關の戸があいて、誰か客の來た聲がした。この上のつびきならぬ客が加はつては、もう初詣は放棄するはかはなくならず、猿江は絶望的だつた。如何なる客かと胸を騒がせてゐるところへ、妻が名刺を持つて、入つて來た。名刺を見るなり、「また來たのか!」と猿江は顔をしかめたが、玄關先ですむお客なので、安堵の氣持は争へなかつた。

名刺の主は、四十前後で、電通省關係の小官吏だつた。二年前の正月三日にも訪ねて來たことがあつた。その日猿江は留守だつたので、四日にまた訪ねて來た。電通事務官といふ肩書に敬意を表して會つてみると、血壓に悩んでゐる猿江に斷食療法をすすめに來たのだつた。猿江の書くものをよく讀んでゐた。自分でも小説の勉強をしてゐて、或る新人育成の投書雜誌に屬してゐるといふことだつた。斷食療法に凝り固つた人物で、一時間餘りといふもの、クドクドと斷食療法の効能を口説かれたのには、猿江は參つてしまつた。前には肺炎カタルを斷食でなほし、今はまた高血壓を斷食で下げて、爽快な氣持で過すことが出來てゐる。何病によらず、斷食療法をしさへすれば必ず快くなるといふやうな偏執ぶりだつた。猿江は醫者の言ふことだけを信じて、民間療法は相手にしないことにしてゐたので、上はの空で聞き流したあと、體よく好意を謝して、歸つてもらつた。その電通事務官がまた現れたのだつた。

猿江は名刺を手を提げて、玄關に出て行つた。

「いづぞやは失敬しました。」

「お目出たうございます。先生、その後血壓の御加減は如何ですか。」

「おかげさんで、グンと下りましたよ。」猿江は取着く島を與へないため、誇張して言つた。

「今幾つくらゐ、おありなんですか。」

「百五十前後です。」

「それでも、先生のお歳にしては、少し高すぎます。斷食療法によつて、下げきる方が安全と存じます。それに、先生のお書きになつたものを拜見すると、まだ不眠や耳鳴りに悩まされてゐる御様子ですが、これもなほしてしまはれるがよろしいと存じます。」

「不眠や耳鳴りも、ほとんど快くなりましたよ。」

「私は血壓が百六十ありましたが、三日間の斷食療法で、百四十に下りました。三日間で結構です。先生も是非一度お試しになつて、腦溢血にかかる御心配を除かれることをおすすめいたします。」

斷食道場は、本部が日暮里にあつて、國府津の海岸に支部があるといふことだつた。電通事務官は、用意の、裏に兩方の斷食道場の所書きがしてある名刺をポケットから出して、一寸きまり惡げに猿江に渡した。

「ぢやア、戴いておきます。今日はお客さんが來てゐますから、これで失禮します。」

猿江は急ぎ立てるやうに客を送り出して、座にかへつて來た。時計はもう十二時を少し廻つてゐた。「やア、失敬、失敬。斷食療法のマニヤにねばられてねえ。」と猿江は言ひ譯しながら、茶の間に叫んで、熱い酒を言ひつけた。小溝には悪いけれど、この一本で急いで恰好をつけて、それから事情を打明けて、一緒に立つて行くことに氣持を決めてゐた。

「斷食療法なんて、減多にやると、危険ですよ。」と小溝は目を光らして、警告的に言つた。「僕の從姉の亭主がですわね、長いこと小學校の校長をしてゐて、恩給を取るやうになつて、罷めてから樂に暮してゐたんですが、こいつがしよつちゆう胃が悪かつたものだから、斷食療法をはじめたんです。T市に斷食療法の先生が來て、一週間の講習があつた時、泊りがけで出かけて行つたんですが、やつてゐるうちに、何も食べないものだから、心臓が弱つて來て、心臓麻痺で死んだんです。」

「それは、無駄死にさしたもんだなア。」

「斷食療法さへしなけりや、今でもまだきつと生きてゐたはずだがと、從姉は嘆いてゐますよ。ですから、用心しなくちやいけませんよ。」

熱い酒が來て、一杯注いだところへ、また客だつた。猿江は自棄になつて、のつびきならぬ客であらうがなからうが、もう初詣は投げるよりほかはないと思つた。收拾がつかないほど、豫定がめちやめちやになつてゆく感じだつた。

「お父さん、K市で『南國文化』といふ雑誌をやつてゐた方なんだつて。」と、今度は娘が取次いだ。K市は猿江の郷里で、そこで出してゐる「南國文化」といふ文化雑誌は、毎月彼の許にも寄贈されて來てゐるのだつた。

「年賀に來てくれたんだな。」と多寡をくくつた猿江は、簡単にすむつもりで出て行つた。彼はなんとなく生氣を吹きかへしてゐた。玄關は戸があいたままになつてゐるのに、客の姿は見えなかつた。遠慮して戸のかげに立つてゐるのかも知れないと思つた。

「どうぞ。」と猿江は聲をかけた。客は返事もしなければ、姿も現さなかつた。「どうぞ。」と、もう一度言つた。

「どうしたんでせう。」と娘は不思議がつて、戸の外を覗いた。娘は道に出て行つた。娘の呼ぶ聲がした。

「變だな。」と猿江は思つた。娘のあとについて來た客は、「どうぞ、お入りになつて下さい。」と言つても、必要以上に遠慮して、玄關の戸につかまつて、顔をのぞけたままだつた。

「僕は、をとしの七月まで、K市で『南國文化』の販賣の方をやつてゐた川上といふ者です。」客は臆して、おどおどとした調子だつた。

「『南國文化』は、今でも毎號送つてもらつてゐますよ。年末には、短い隨筆を書いてやりました。」猿江は

客の氣持をほぐしてやらうとして、氣安い態度を示した。ひとにおどおどせられるのは、苦手だった。

「まだつづいてゐますか。」と、客は雑誌をなつかしむやうな目をあげた。「僕と先生との繋がり、それだけなんです。をとしの七月まで、先生の御郷里で雑誌をやつてゐたといふ、繋がりとも言へないほどの、かすかな、繋がりだけなんです。僕は國もK縣ではなくて、お隣の縣です。」

インテリらしい、こだはりのない言ひ方には好感が持てたが、なんのためにそんなことを言ふのか、猿江は少し焦ら立つた。

「何か御用だったでせうか。」

「僕、いま非常に困つてゐるのです。」と客は心を揮ひ立たせるやうにして答へた。「正月早々、こんなことを申し上げられた義理ではありませんが、先生に少しばかりお助けしていただけないかと思つて上つたんです。」

「さうだったのか。」と初めて氣づいて、猿江は川上といふ男のなりを見た。別に目立つて、見すばらしいなりはしてゐなかつた。猿江の家にも時折無心に來る者があつて、それらの人間にくらべれば、まともな方であつた。中には、ムウツと垢の臭ひが鼻を衝いた者もあつた。川上は上衣の下に紺のジャケツを着込み、茶色のオーバーをひつかけてゐたが、さうと思つて見なければ、オーバーの色が大分褪めてゐるのも目をひかないであらう。帽子をかぶらない頭も、油氣こそなかつたが、むさくるしいといふ感じはしなかつた。靴もボロ靴ではなかつた。

猿江は、かういふ無心者に來られる度に當惑する。施さうか施すまいかと迷つてしまふ。冷たい不人情家であるまいとする心と、甘い人情家であるまいとする心との闘ひをくり返す。詐欺にかかつた経験もあるの、それを警戒する心もある。彼はしばらく言葉を嚙み込んでゐて、やつと口を開いた。

「僕の家なんかにねえ、社會福祉的その他の寄附を言つて来る所が澤山ある。あなたのやうに助けを求めて来る人もある。また自分の周りや身近かな者で、病氣やなんかで助けてやりたい人もある。ところが、僕の収入には限度があり、しかもそれが乏しいと來てゐるから、全部に手を廻すなんてことは、とても出來ないんだ。それで僕はねえ、自分の周りや身近かな者を少しでも助けて、それで餘裕があれば、遠くへ押し及ぼさうと考へてゐるんだ。正直に言つて、あなたにまでは手が廻りかねる感じだが、僕なんかよりもつと身近かな人で、助けの得られる人はいませんか。」

「さういふ人には残らず迷惑をかけて、擧句の果てのことなんです。僕は東京に來てから、小さな雑誌を出したり、出版社で働いたりしましたが、それがみんな駄目になつたんです。もうかうなれば天理教に入らうと思ひましてねえ、暮に鴨田源治郎さんを訪ねて、天理教のえらい人に紹介狀書いてもらひました。鴨田さんのお書きになつた小説を読んでゐて、天理教に關係のあることを知つてゐたんです。鴨田さんの紹介狀を持つて、その天理教のえらい人を訪ねましたが、北海道へ布教に行つてるとかで、留守でした。仕方がないので、自分で直接隅田川の向うの教會へ行つて、天理教に入れてくれと頼みました。しかし、心を入れ換へて來なければ入れることが出來ないと言つて、斷られました。天理教でさへ、僕を拒否するんです。」と川上は心外さうに言つたが、餘計者のやうな自分の境遇を自嘲してゐるやうでもあつた。

猿江は長い話にムズムズしてゐた。チラッ、チラッと、要點だけしか頭に入らなかつた。彼の頭は、なんとかして早くこの場を切上げる方法はないものかと、思案に暮れてゐた。彼は身の上話を打切らせようとして言つた。

「一體、あなたはこれからどうするつもりですか。」

「僕はこれから、山梨縣の小淵澤といふ所にゐる、小學校時代の友達を訪ねて行かうと思つてゐます。友達